

# エラスムスの *Cyclops sive Evangeliphorus* (1529) について

木ノ脇悦郎

「キュクロプスあるいは福音書運び屋」と題されたこの対話は、1529年3月にフローベン書店から発行された新版『対話集』に掲載された新作の対話である<sup>1</sup>。この頃、宗教改革運動は両陣営の激しい対立を見せるようになっており、その中でエラスムスは特にカトリックの保守的神学者達から激しく非難されるようになっていくのである<sup>2</sup>。しかもただカトリック神学者のみならず、反対の陣営である改革推進の側からも批判を受けたり、誹謗中傷がなされたりする中で、彼は変わる事無く自分のスタンスを守りつづけて、困難な状況を生きていたといえる。

従って、この対話においても至る所に彼の立場やその立場から見た両陣営に対する批判を読み取ることが可能である。例えば、本文中でエラスムスの『校

1 P. Smith は、この版を1528年 Cervicorn の版として扱っている (Preserved Smith, *A Key to the Colloquies of Erasmus*, Harvard Univ. Press, 1927, Rep. 1969, p. 44-50)。しかし、現在の諸研究では本文に指摘したとおり1529年3月出版のフローベン版として扱っており、ここでは、新しい研究に従うものとする。例えば、Craig R. Thompson (Tr.), *The Colloquies of Erasmus*, The Univ. of Chicago Press, 1965, p. 415。また、最新のエラスムス校訂版全集の内『対話集』のための L. E. Halkin, F. Bierlaire, R. Hoven (ed.), *Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterodami, I-III*, Amsterdam, 1972 (以下、ASD、I-IIIのように略記する)

2 例えば、この年の2月にノエル・ベダは『隠れたルター派について』*Apologia adversus clandestinos Lutheranos* という批判書を公にしエラスムスやフランスの人文学者ルイ・ド・ベルカンをルター派異端と攻撃しているのである。一方、エラスムスの居たバーゼルでは聖像破壊がなされ、改革運動が激しさを増し、そのため彼はバーゼルから退去することになり、ライン河を下ってフライブルクに逃れるのである。

訂版新約聖書』についての批判を止めないフランシスコ会士に対してポリフェムスが散々に打ちのめし、聖書でその頭を三度叩いたというポリフェムス自身の言葉について、P. Smith はそれが事実に基づいたことと考えられると主張している<sup>3</sup>。事実がエラスムスの描写したとおりであるかどうかは別としても、エラスムスの側に立つ人間達が批判者達に対して様々な形で反論やエラスムス擁護をなしていたであろう事は想像に難くない。後段に述べるように科白の主であるポリフェムスという登場人物にはエラスムスと関係のあった人物を当てているからである。

また、当時のバーゼルの状況を見てみると、先に触れたように改革の混乱の最中にあり、エラスムスは慣れ親しんだこの町を去る決心をしているのである。しかし、そこには過激化していく改革者達とそれを是認している市政府に対する非難の気持ちもあったであろう。本文中の「羊の頭を持ち、狐の心を持った者」という表現がバーゼルの改革の中心となっていたエコランパディウスへの中傷であるとして弁明するように求められた事実があった。エラスムスはそれが話者の一人であるカニウスについて述べたものであるとして批判をかわそうとしたが、事実はやはりエコランパディウスへの批判であったと思われる<sup>4</sup>。

この時代の預言者たちが、世の終わりの接近を告げているという記述につい

3 P. Smith, op. cit., p. 48, 彼はの中でフランシスコ会士の名前を具体的に挙げている。Francis Titelmann であるという。この人物は、ルーヴアン大学に属するフランシスコ会士であり、この対話が発行された頃、中世の伝統的な聖書解釈の立場からエラスムス、ヴァラ、ルフェーブル・デターブル等の人文学者の解釈を批判していた。特にこの年、*Collationes quinque super epistolam ad Romanos* でエラスムス批判を為し、エラスムスはこれに対して *Responsio ad Collationes cujusdam juvenis Gerontodidascali* を書き、反論している。Peter G. Bietenholz (ed.), *Contemporaries of Erasmus*, Vol. 3, Univ. of Toronto Press, 1987, p. 326-27 参照。

4 この見解は Thompson に従った。Craig R. Thompson, op. cit., p. 416 エラスムスのエコランパディウスに対する姿勢については、その往復書簡の内容の変遷を見れば明らかであり、最初の評価からは程遠い批判が述べられるようになっていく。この年にフライブルクに逃れる前にエコランパディウスと和解をしたといわれているが、しかし、性急な改革はやはりエラスムスには受け入れ難かったのであり、批判を残したのであろう。注6に記載した書簡の内容をも参照のこと。

でも、それが当時のヨーロッパの歴史的状況を端的に反映していることがはっきりしている。例えば、アナバプテストの人々の熱狂的な説教の中にそれが見られるし、エラスムスはそのことについて1529年4月13日に Louis Ber 宛に書簡を送り、その中で熱狂的なアナバプテストの活動を取り上げ、悔い改めを迫る人々の様子を伝えている<sup>5</sup>。特にホフマン・メルヒオルは1523年ごろからルター主義の説教者として活動し、1533年に世の終わりがくるということをその「ダニエル書注解」の中で明言して、ヨーロッパ各地を旅していたのである。

さらに、対話本文の中で「偽善」hypocrisisについて語り、何が福音的な生き方であるかを同時に示すことで時代の状況に対し警告を発しつつけるという彼独特の改革的な意志を示していることも触れておかなければならないであろう。このように、この対話が単に文学的な面白さを狙ったものではなく、優れて歴史的なものであり、宗教改革におけるエラスムスの立場を明示するものとしても有益な作品であるといえよう。

ところで、最後にこの対話の登場人物について触れておかなければならない。彼の対話に出てくる人物は、架空の人物でありながら実在の人物を思わせる名前を持つもの、実在の人物そのもの、古典的存在を変形したもの等多岐にわたるのであるが、この対話では実在の人物をそのまま登場させて、それぞれの特徴を出した発言をさせているのである。その一人はカニウスであり、もう一人はポリフェムスである。カニウス、Nicholas Cannius はアムステルダム生まれのオランダ人で、Nicolaas Kan という名で、1524年にルーヴアン大学に入学し、1527年の春からエラスムスの奉公人の一人となり特にギリシャ語の筆者として有益な働きをした人物であるという。エラスムスが1529年にフライブルクに移る時にも、彼を助けており、エラスムスはこの対話に彼を登場させるこ

---

5 P. S. Allen (ed.) *Opus Epistolarum Desiderii Erasmi Roterodami*, Tom. VIII, Oxford Univ. Press, 1934, p. 137-38 参照。(以後 E. E. Tom. VIII., のように記し、書簡番号を Ep. 2149 と記す)

とを断った上でその名を使っているのである<sup>6</sup>。

ポリフェムスについてはゲント出身の Felix Rex であることが知られており、彼は最初フローベン書店に勤めていたが、後にエラスムスの奉公人となって彼の書簡を運んだり、受け取ったりする役目を担っていた人物である。彼はいろいろな言葉の知識を披露することを好んでいたことからポリフェムス（ギリシャ語のボルス、つまり「多い」とフォーネー「声」の合成語）というニックネームがついたようである。ポリフェムスは、一つ目の巨人族で、野蛮、乱暴な人喰いのキュクロプスの一人でもあることから、エラスムスは彼が恥知らずで、喧嘩っ早く、少なからず呑み助であったので、彼をキュクロプスと呼ぶこともあったという<sup>7</sup>。

以上のような二人の登場人物の性格からして、本文の訳ではカニウスには出来るだけ丁寧な言葉を語らせ、ポリフェムスにはその性向にふさわしく出来るだけ乱暴に語ってもらうことにした。

### ポリフェムス、カニウス<sup>8</sup>

Can. ポリフェムスさん、ここで、いったい何か獲物でも狙っているのですかな。

Pol. 籠も狩猟用の槍もなしに、薪採りに行くとでも思っているのか。

Can. 偶然に、森の妖精でも捕まるのでは？

6 P. G. Bietenholz (ed.), op. cit., Vol. 2, p. 252-53 参照。また、このことに関してエコランパディウスに宛てた書簡に次のように書かれている。「『キュクロプス』という対話が出されたとき、ある者は頭が羊、心は狼、長い鼻を持ち云々と言われていることがあなたのことではないかと疑いを持ったのでした。この遊びを、私の奉公人であるニコラウス・カニウスに設定したのは、彼が対話集の中に取り上げて欲しいとしきりに願っていたからなのです。彼はそのような頭巾をかぶり長い鼻を持っており、色黒く、髪も黒いのです。あなたがそのような頭巾をお使いだと聞いたことはありませんし、状況が違うはずです。一中略—また、自分自身の人生はそれ以上汚れたものがないほど汚れているくせに、美しく飾られた福音書の写本を持ち歩いているポリフェムスも取り上げて欲しいということでした」と。(E. E. Tom, VIII, p. 135, Ep. 2147 参照)

7 注 6 の書簡の内容参照。

8 本文中では、ポリフェムスは Pol. で、カニウスは Can. で表記することにした。

- Pol. お前さん、きれいな予想をするもんだな。見ろよ、獵師の罾はこれだ。
- Can. 私はいったい何を見ているのだろう。ライオンの毛皮を纏ったバッカスでしょうか。古い写本を持ったポリフェムスでしょうか。Γαλή κροκωτόν (サフラン色のガウンをまとった猫)<sup>10</sup> ってところでしょうかね。
- Pol. 俺は多くの本をサフラン色だけでなく、朱や青 (lasurioque) でも飾ったぜ。
- Can. 私が言っているのはサフラン色についてでなく、いわばギリシャ語のことを言っているのです。まるで戦争のためかなんかに見えるようですね、なぜって、それは節や、板や銅のワッカで飾り立てられているじゃないですか。
- Pol. よく見ろよ。
- Can. 見ていますよ。実際、全くきれいなものです。でも、あなた、まだ十分に飾ったとはいえませんね。
- Pol. 何か足りないものでもあるのかね。
- Can. あなたの紋章を加えるべきでしょう。
- Pol. どんなもののかね。
- Can. さしずめ酒樽を眺めるシレススの頭ってところでしょうか<sup>11</sup>。ところ

9 アリストファネスの喜劇『蛙』の冒頭部で、ディオニューススがヘラクレスを訪ねる場面でディオニューススの異様な姿を見て笑うところ。「だが笑いが追い払えんわい。サフラン色の衣の上に獅子の皮とはどういうつもりだ。半長と棍棒との組合せは、こりゃどうしたことだ。どこにご旅行ですかね」というヘラクレスの科白がある。高津春繁訳、『ギリシャ喜劇全集』Ⅱ、人文書院、1975 (1961初版)、161頁。

10 何か奇妙で、風変わりであり、ふさわしくないものについてのギリシャ語の諺。エラスムスはそれを彼の『格言集』*Adagiorum* の中に採用し、ラテン語の *Feli crocoton* (猫にサフラン色の衣服) と共に説明し、その名譽にふさわしくない人に名譽が与えられたり、全く似合わない者や用い方を知らない者に何かが与えられることと説明する。日本語の諺「猫に小判」に相当する。*Desiderii Erasmi Roterodami Opera Omnia*, Tom. II, Leiden, 1703 (rep. 1961), p. 99 (以下、LB. II, p. 99のように記す)。英訳は *Collected Works of Erasmus*, Vol. 31, Univ. of Toronto Press, 1982, p. 211-12 (以下、CWE, Vol. 31, p. 211のように記す)。

11 ギリシャ神話の中でセイレーンとも呼ばれ、ディオニューススの仲間で、複数で描かれる。彼らはディオニューススの家庭教師、音楽家で、知識を与えられており、酒を作りそれを飲み、ニンフを追いかける酔っ払いの老人としても描かれている。エラスムスの『格言集』にも採用されているが一つの論文ほどの長さなので割愛する。LB, II, p. 770, CWE, Vol. 34, p. 262-82

で、持ち歩いているのは一体何です。酒飲みの本ですか？

Pol. 恥知らずな冒流だぜ。つまらんことをべらべらしゃべらず、よく見てみなよ。

Can. じゃ、なんですか、こう神聖なものか何かでしょうか。

Pol. その通りさ、これ以上に神聖なやつは何もないという代物よ。福音書さ。

Can. 全くそのとおりですね。それで、福音書でポリフェムスはどのようにいうのですかな。

Pol. キリストと一緒にキリスト者はどうすべきかとは聞かないのかい。

Can. あなたのような人に戟槍<sup>ほこやり</sup><sup>12</sup>が本当にふさわしいのかどうか私には分かりません。というのは、もし知らない人がそんな姿で、私に海で出会ったとしたら、私は彼が海賊だと信じるでしょうし、森で出会ったら、殺人者と思うでしょう。

Pol. だがよ、この福音自体は俺達に外側だけを見て判断しちゃならねえってことを教えているのだぜ<sup>13</sup>。というのも、凶暴な心が、よく青白い顔の下に隠れているように、たまには髭面で、太い眉毛、獷猛な目つき、縮れっ毛をなびかせ、兵士のマントを着、切り詰められた靴を履いたような奴が、福音的な心を隠していたりして驚かされるってもんだ。

Can. 勿論ですとも。時には狼の毛皮の下に羊が隠れている事もあります。もしあなたが寓話を信じられるのであれば、ライオンの抜け殻の下にロバが隠れている事もあるのですよ<sup>14</sup>。

12 本文中では、halbardacha という用語を使っているが、これはドイツ語の Hellebarde あるいはフランス語の Hallebarde のラテン語化したものと言う。ラテン語の bipennis に当たる。

13 ヨハネ福音書 7:24 「うわべだけで裁くのをやめ、ただしい裁きをしなさい」を想定しているのであろう。

14 『格言集』Induitis me leonis exuvium から取られている。エラスムスはいまのギリシャ語 Ενδύετέ μοι τὴν λεοντίνην を取り上げ、それが本来それがあるべき姿よりもっと立派に見せかけるためのからくりであると説明し、アリストファネスの『蛙』、冥府の世界にケルベロス犬を捕えに行くヘラクレス、さらにルキアノス、プラトン等の例をあげている。LB, II, p. 137, CWE, Vol. 31, p. 290-91 参照。

- Pol. 確かに、頭が羊で、心は狐って奴を俺は知ってるぜ。そして、俺は奴に喜んで頼んださ。黒い目は持っていても心は真っ白になってな。例えば適当な色によくメッキするようにさ。要するに、長い鼻を持つのと同じように長い友情を持とうってわけさ<sup>15</sup>。
- Can. もし、羊の頭巾をかぶっている人が、その頭が羊を表しているのだとすれば、頭が羊やダチョウの格好をして、あなたはどんな荷物を運ぼうというのですか。更に、頭が鳥で心は驢馬というような人はもっと馬鹿げたことをしていることになるのではありませんか。
- Pol. えらく侮辱してくれるじゃねえか。
- Can. でも、あなたがいろいろな飾りで福音書を飾り立てるときに、それがあなたを誉めそやすことになるのであれば、結構なことだったじゃないですか。あなたは色とりどりに飾り立てました。出来るならばあなた自身をもよい習慣で飾って欲しいものですね。
- Pol. そりゃ、そうされるだろうよ。
- Can. その結果、それがあなたの習慣になるのですね。
- Pol. だが、あんたは悪口を言い放ったんだぜ。福音書を持ち歩いている人間を馬鹿にしたんじゃないかね。
- Can. 決して変なことじゃないでしょ。
- Pol. 何だって、じゃ、あんたには俺が少し変わって見えるってわけか、あるいは俺があんたに驢馬の頭で要求したとでもいうのかね。
- Can. 驢馬の耳が立っているのだしたら、私は決してそんなふうには考えないでしょう。
- Pol. じゃ、断然水牛ってとこかな。
- Can. その比較は面白いですね。でも私は少ししかしゃべっておりません、いや何もしゃべってはおりませんよ。
- Pol. 卵と卵の間にちがいでもあるというのかね。

15 これがパーゼルで問題となった個所で、エコランパディウスを中傷していると思われるのである。冒頭の解説参照のこと。

- Can. それでは、中指と小指の間に何か違いがあるというのですか。
- Pol. 中指のほうが長いじゃないか。
- Can. うまく答えたものですね。では、ロバの耳と狼の耳の違いはなんでしょう。
- Pol. 狼の耳が短いってことさ。
- Can. よくわかっていらっしゃる。
- Pol. だがよ、長いとか短いってのは、俺の場合耳じゃなく掌とか腕で測るもんで、耳で測ったりはしないぜ。
- Can. ところで、キリストを運ぶ人はクリストフォルスと呼ばれてきたのですが、福音書を持ち運んでいるあなたはポリフェムスというよりも、むしろエウアンゲリフォルスと呼ばれるべきではないでしょうか。
- Pol. 福音書を持ち運ぶことが神聖なこととは考えないとでもいうのか。
- Can. そうじゃありません。もしあなたがロバこそ最も神聖なものだと告白しないのでしたら……。
- Pol. どうしてそうなんだ。
- Can. ロバはたとえ一頭でもそのような本を三百も運ぶことができるでしょう。ところが、あなたがどんなに上手く荷籠を背負ったとしてもロバのほうがあなたより少ない荷物しか運ばないとは考えられないのですよ。
- Pol. そんなロバなら、神聖なものだと認めても悪くはないな。なぜならば、キリスト様を運んだのだからな。
- Can. 同じ神聖さをあなたに与えることを私は惜しみませんよ。もしお望みなら、キリストがお乗りになったそのロバの遺品をあなたに与えましょう。そうすればあなたは心ゆくまで接吻できるでしょうから。
- Pol. 最高にありがたい贈り物をくれるもんだ。だって、キリスト様の体に触れたそのロバも神聖なものだからな。
- Can. キリストを平手打ちにした人達も<sup>16</sup>、キリストに十分触れたのですが。
- Pol. ふざけないでくれよ。福音書を持って回ることは神聖ではないのかね。

16 ヨハネ福音書18:22, 19:3の記事から。



- Can. もし、それが偽善でなくて真実にされたことでしたら、神聖なことですよ。
- Pol. 偽善ってのは修道士に当てはまるもので、兵士にとっちゃ偽善みたいなもんが何だっていうんだ。
- Can. では、偽善というのは何だとお考えなのか、まず説明してくれませんか。
- Pol. 心の中に隠れていることを他人に見せびらかすことじゃないのかね。
- Can. ですが、福音書を持ち歩くことは何かを見せびらかすことになるのでしょうか。それは福音的な生き方ではないのでしょうか。
- Pol. 俺も同じように思うけどさ。
- Can. ですから、その生活が文書にふさわしくないとすれば、それこそ偽善ということになるのではないのでしょうか。
- Pol. そうかもしれないが、だがよ、福音書を正しく持ち歩くってのはどういうことなんだ。
- Can. ある人達は、フランシスコ会士達がその会則をそうしているように、いつも手に持ち歩いております。またパリの人々やロバや馬は同じように担いで運んでいますし、口で運ぶ人達もおります。口で運ぶ人達というのはキリストや福音のこと以外は何も語らない人達で、それはファリサイ派のようなものです。ある人達は心で運びます。ですから、正しく運ぶ者というのは福音をその手、口、そして心で運ぶ者のことなのです。
- Pol. そんな奴が一体どこにいるんだ。
- Can. 教会には助祭がいます。彼らは書物を運んで、人々のために朗読し、それを心に保っているのです。
- Pol. だからといって、心で福音を運ぶ奴がみんな聖なる者というわけでもないだろ。
- Can. 詭弁をおっしゃらないで下さい。心から愛してもいないのに心で運ぶことは出来ません。また、その生き方が福音に従っているのであれば、完全に愛しているということにはなりません。

Pol. そんな厳しさについて行けるもんか。

Can. もっと雑な常識を話しましょう<sup>17</sup>。もしあなたがポーヌ産葡萄酒の樽を自分の肩で運ぶとしたら、大変な苦労ということになりませんか。

Pol. そりゃ、そのとおりさ。

Can. 喉に保存しようとすれば、すぐに吐き出してしまうでしょう。

Pol. そんなことして何になるというんだ。第一、俺はそんな習慣はないね。

Can. しかしもし、それが習慣だとすれば、あなたはたっぷり飲みますか。

Pol. それ以上に神聖なことはないからな。

Can. 身体全体が熱くなり、顔が赤くなって、様子が快活になりますよね。

Pol. 全くだ。

Can. 福音は心が沈んだ様子の時に、それと同じような働きをしますし、人間の行為全体を新しくするものです。

Pol. それで、お前さんにゃ俺が福音に従って生きていないと思えるって訳か。

Can. その問いに対してあなたより正しい解答を与えられる人は他にいないでしょう。

Pol. もし両刃の斧<sup>18</sup>で賭けがなされていてモカ。

Can. もし誰かがあなたのことを面と向かってうそつきとか放蕩者とか呼んだら、あなたはどうしますか。

Pol. 俺がどうするかって。奴は俺の拳骨に気付くことになるだろうよ。

Can. では、誰かがあなたに拳骨を振るったとしたら、どうします。

Pol. 拳骨の代りに奴の首をちょん切ってやるさ。

17 At dicam crassiore Minerua という原文であるが、crassa Minerua は「粗雑な常識」を意味するところからこのように訳した。ミネルヴァはイタリアの技術、職人の神で知識や技術を統括している、ギリシャ神話のアテーナーと同一視される。したがって、crassa（粗雑な）というミネルヴァに相応しくない形容詞をつけることによってつまらない常識を意味する。それは pingui Mineruva, crassiore Musa と同意であり、古くから一般に用いられた諺である。LB, II, p. 42, CWE, Vol. 31, p. 85-86参照。

18 注12参照。

- Can. あなたの書物には、悪口の代りに好意的な言葉を返すように教えられていますし、「右の頬を打たれたら、左も差し出すように」とありますよ<sup>19</sup>。
- Pol. 読んだことはあるが、忘れちゃったよ。
- Can. あなたはしばしばお祈りをすると思いますか。
- Pol. そいつはまるでファリサイ人みたいだな。
- Can. ファリサイ的というのは長々と飾り立てて祈ることなのです。あなたの書物が教えているのは、常にしかも心の中で祈ることなのです<sup>20</sup>。
- Pol. それでも、俺は時々祈るぜ。
- Can. いつですか。
- Pol. 思いついた時にさ。週に一、二度ってとこかな。
- Can. その時、あなたはどんな祈りをするのですか。
- Pol. 主の祈りさ。
- Can. 何回ほど祈りますか。
- Pol. 一度さ。だって、福音はしゃべりすぎ<sup>21</sup>、つまり同じことを繰り返すなって教えているぜ。
- Can. それでは、主の祈りに心を集中して祈ることが出来ますか。
- Pol. 試したことはないが、声に出して祈るだけでは十分じゃないってのかね。
- Can. 私が知っているのは、神は心からの声以外にはお聞きにならないということだけです。ところで、あなたは繰り返し断食をしますか。
- Pol. いや。
- Can. でも、あなたの書物は祈りと断食を奨めていますか。

19 ルカ福音書 6:28, 29からの引用。

20 マタイ福音書 6:5-8にもとづいた表現。

21 Battologiam と本文は表記しているが、もともとギリシャ語 *battología* からきており、「どもりながらしゃべる」「同じ事を繰り返し繰り返ししゃべる」ことを意味する。つまり無駄に話すことで、この言葉は無能な詩人 Battus からきているという。LB, II, p. 444 CWE, Vol. 33, p. 70

- Pol. 腹の奴がその他のことを望まなければ、そうしてもいいんだがな。
- Can. しかし、パウロは腹に仕える者はイエス・キリストには仕えていないと言っています<sup>22</sup>。ところで、あなたはいつでも肉を食べますか。
- Pol. あてがわれれば何時でも食べるさ。
- Can. あなたのように剣闘士のような頑強さは乾し草や樹皮でも育てることが出来ますよ。
- Pol. だがよ、キリスト様は口に入っただけで人間が汚されることはないって言ってるぜ<sup>23</sup>。
- Can. そのとおりです。ただし、適度に、しかも躓きを与えなければの話です。キリストの弟子であるパウロは、弱い兄弟をその食物の故に躓かせるよりむしろ飢えて死ぬことをさえ望んでいますし<sup>24</sup>、また私達がすべてのことにおいてすべての人を喜ばせるように彼に倣って生きるように私達を促しております。
- Pol. パウロはパウロ、俺は俺さ。
- Can. エーゲ<sup>25</sup>の仕事は雌山羊を飼うことです。
- Pol. 俺もそうだったらいいのになあって思うぜ<sup>26</sup>。
- Can. 素晴らしい願いです。あなたは雌山羊よりももっと容易に雄山羊になるでしょう<sup>27</sup>。
- Pol. 俺が言ったのは、そうなりたいってことじゃなくて、現にそうでありたいってことだぜ。
- Can. 完璧ですね。では、あなたは貧しい人たちを喜んで援助しますか。
- Pol. やる物なんて何もないさ。

---

22 ローマ書16:18から。

23 マタイ福音書15:11

24 ローマ書14:15

25 伝統的に用いられていた羊飼いの名前。

26 *Malim esse* という表記であるが、コンテキストの中で本文のような訳を採った。

27 カニウスはポリフェムスの科臼を理解していないふりをして、勝手に自分の言いたいことをしゃべっている。このあたりの対話はそれぞれに噛合わないように作られているものと思われる。

Can. でも、節制して生活するとか、熱心に働けばそうなることが出来るんじゃないでしょうか。

Pol. 暇なほうが気に入っているのな。

Can. 神様のご命令を守っていますか。

Pol. 面倒なこった。

Can. 犯した罪についての懺悔は。

Pol. キリスト様は俺たちのために償いをしたんじゃないのかね。

Can. それでは、あなたは福音を愛していると公言なさるのですね。

Pol. じゃ、言ってみようか。俺の近くにいたフランシスコ会士がエラスムスの新約聖書についてつべこべしゃべり続けていたのさ。それで、俺はこっそりそいつに会い、左手で奴の髪の毛を引っつかみ、右手の握りこぶしで拳骨を見舞って派手に青痣を作ってやったさ。それで奴は顔中腫れ物でいっぱいになったって訳だ。どう思うかね。俺は福音を助けたことにならないかね。それに、俺は奴を罪から解放してやったのよ。つまり、奴の本でそいつの頭を三度ぶっ叩いて瘤を三つ作ってやったんだ。父と子と聖霊の御名においてな<sup>28</sup>。

Can. それで十分です。まったく福音的です。それこそ福音書で福音書を守ることです。

Pol. 俺は、無茶苦茶に際限も無くエラスムスに対して騒ぎ立てていた同じ修道会の別の奴にも会ったぜ。それで、俺は福音に熱心だからよ、そいつに土下座して許しを求めるように言ってやったさ。それに、悪魔にけしかけられて言ったことを許してくれと頼むようにしてやったのさ。そうしなかったら、奴の首をちょん切っていたろうよ。そんな時の俺の顔ってのはまるで怒った時のマルスのようだったぜ。それには証人もいるんだぜ。

Can. その男がすぐ気絶してしまわなかったのは不思議なことですね。でも、話を進めましょう。あなたは敬虔に生きていますか。

28 冒頭の解説、特に注3参照のこと。

- Pol. 老いぼれてしまえばそうなるだろうよ。だけど、カニウスさんよ、俺に本当のことを告白でもして欲しいってことか。
- Can. そうではありません。私は司祭ではありませんから、もし告白したいのなら、他の人を探してください。
- Pol. 普通、俺は神様に告白するのさ。だけど、白状するが俺はまだ福音書を完成しちゃいないんだ。そいつを求めている一人なのさ。俺たちは四つの福音書を持っているがよ、そのうちで特に四つのことを求めているのさ。つまり、腹を満たすこと、腹の下にあるものに不自由させないこと、そして楽しく生きられること、最後にしたいことが出来るってことさ<sup>29</sup>。もしそれが十分果たされるならよ、俺たちちや杯を上げて叫ぶぜ。「勝利者万歳、アポロ万歳、福音書は生きているぞ、キリスト様が支配するぞ」ってな。
- Can. それはエピキュロスの生き方であって、福音的とは言えませんよ<sup>30</sup>。
- Pol. 無理に反対はしないさ。だがよ、おまえはキリスト様が何でも出来るってことを知ってるな。とすれば、あの人は俺達をあっという間に他の人間に変えることだって出来るわけさ。
- Can. 豚にすることだってね。よい人間に変えるよりもそのほうがもっと容易だと私は思いますよ。
- Pol. 豚、牛、驢馬、駱駝より悪いものがこの世に無いように願いたいものさ。ライオンよりも凶暴、狼よりも強欲、雀よりも好色、犬よりもよく噛みつく奴、蛇より毒のある奴をよ、おまえさん、たとと見てるんだろ。

29 これは明らかにエラスムスが反対していたような考え方であり、当時彼に対する様々な批判の中にこのような批判が存在したり、あるいは逆に改革を叫ぶ人々の中に無秩序に放埒な行為に走る者達がいたことを皮肉っているものである。例えば、最初エラスムスと思想や行動を共にしていたが、後に宗教改革の陣営に加わりエラスムスを故意に宗教改革と結びつけようとした Gerard Geldenhower（あるいは Noviomagus 1482-1542）に対して書いた *Epistola contra quosdam, qui se falso jactant evangelicos*、（通常は略して *Epistola contra pseudevangelicos*）において同様な批判を見ることが出来る。LB, X, p. 1579-80参照、また Gerard Geldenhower については Peter G. Bietenholz(ed), op. cit. vol. 2, p. 82-84参照のこと。

30 前注のうち、LB, X, p. 1578において同様の表現を見出すことが出来る。

- Can. 動物の話より人間の話に話題を変えた方がよくはありませんか。
- Pol. いい事に気づかせてくれたぜ。だってよ、この時代の預言者連中は世の終わりがそこまで来てるって教えているんだぜ<sup>31</sup>。
- Can. みんなが急いでいる訳ですね。
- Pol. 俺はキリスト様の手を期待してるぜ。
- Can. 御覧なさい。あなたは彼の手に柔軟な性質を示したのです。でも、彼らは一体どこから世の終わりが近づいているなどという考えを得てきたのでしょうかね。
- Pol. 奴らの言うには、洪水が人間に襲いかかった時と同じことを今の人間がしているからだって云うんだ。つまり、宴会をして、痛飲し、浮かれたり、建物を造ったり、結婚したかと思うと娼婦を買い、物を売り買いし、高利で借りたり貸したりしてるって訳さ。王様は戦争をし、坊主どもは財産を増やすことに熱心、神学者どもは三段論法を振り回し、修道士どもは世界中を駆け回り、人々は騒ぎ立てているって有様だ。エラスムスは『対話集』を書いて（文句を言ってるのさ）。要するに、飢え、渇き、強盗、戦争、疫病、分裂、良いことは一つもなく、何でもかんでも悪いってことさ。こんなことで、人間に終わりが近づいてるってことを知らせてるんじゃないのかい。
- Can. このように積み重ねられた悪のうちであなたにとって最も嫌なことは何でしょうか。
- Pol. 当ててみな。
- Can. あなたの財布に蜘蛛の巣が張るってことでしょうか。
- Pol. お前さんがそいつをビタリと当てなかったのは残念だな。今、俺は友達と一緒に飲んでの帰りさ。だからよ、お前さんがそう願うなら、何時か素面で福音について語り合おうぜ。

31 冒頭の解説、特にその中の注5参照のこと。

特注：英文表題に *The Colloquies of Erasmus* (12) としたのは、これまで『福岡女学院短期大学紀要』、『神学研究』に継続して掲載していたものの続きであり、『対話集』の12個目の訳であることを示す。

Can. 何時になったら、あなたが素面であるのを見つけられるでしょうか。

Pol. そうなってしまった時さ。

Can. 何時そうなりますかね。

Pol. お前にそう見えた時がそれだ。カニウスさんよ、それまで達者でいな。

Can. 逆に、あなたこそそうしてください。お名前にふさわしいものになるように。

Pol. お前さんが俺より優れているってことに反対はしないさ。だがよ、せっかくカニウスって名前があるんだから、誤魔化したりしないように頼むぜ。